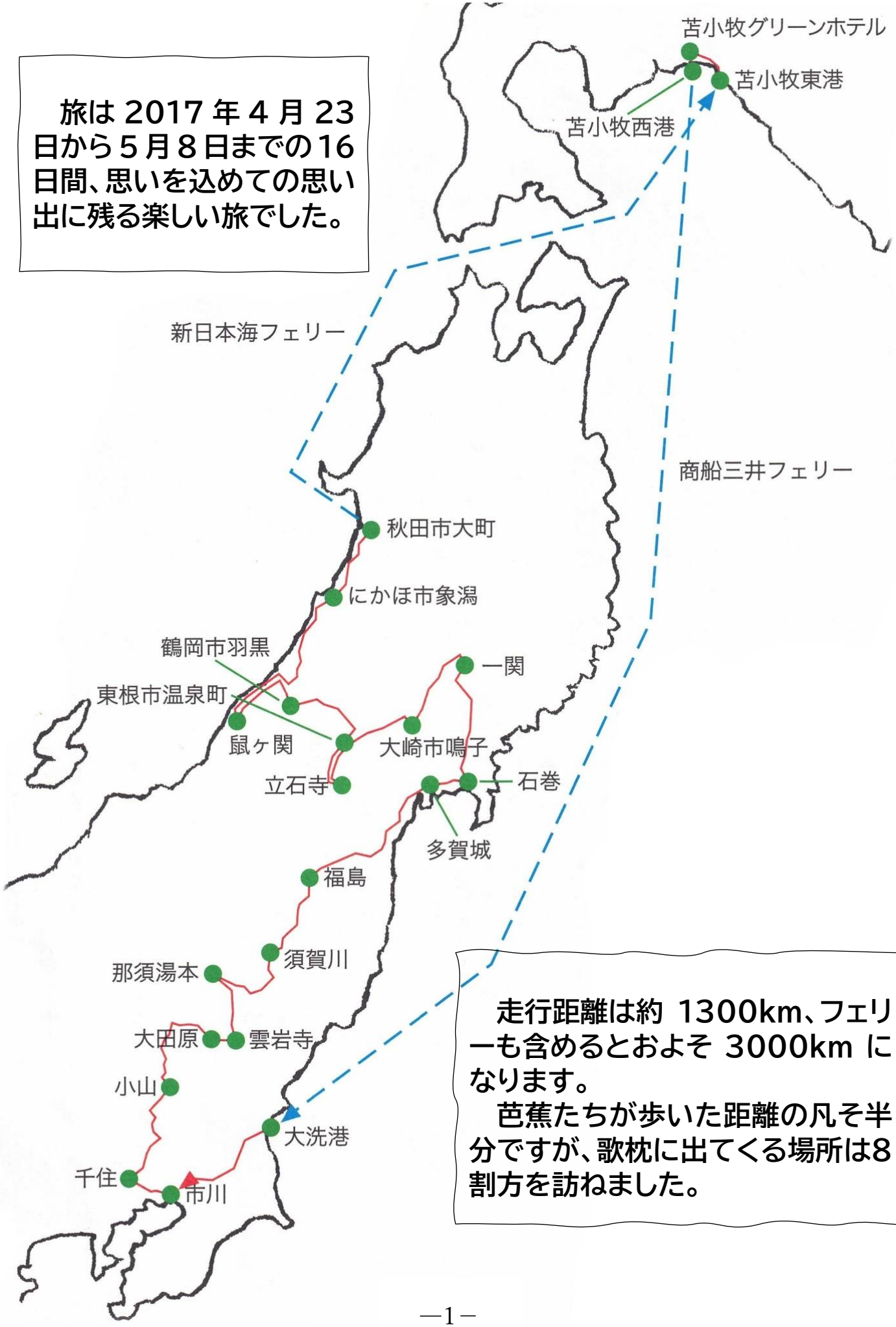
写真で綴る
おくのほそ道

2023.11.10

市川二中同窓会 14 期　鈴木尚賢

旅は 2017 年 4 月 23 日から５月８日までの16日間、思いを込めての思い出に残る楽しい旅でした。



走行距離は約 1300km、フェリーも含めるとおよそ 3000km になります。
芭蕉たちが歩いた距離の凡そ半分ですが、歌枕に出てくる場所は8割方を訪ねました。

１．　出発・東京・埼玉・栃木・茨城・福島

「月日は百代の過客にして、行きかふ歳もまた旅人なり」松尾芭蕉は人生というものをそう心得たのでしょう。

　私の知り合いの方々も旅に出られました。
ある方は、総行程500Km 程もある東海道を足かけ1年3か月、延べ日数33日を費やして踏破されたとか。またある方は西国八十八ヵ所をツアーを利用して二か年かけて結願されたとか。

私の旅は、徒歩とヒッチハイクで東京から大阪まで、自転車で千葉から会津坂下まで、などと気ままな一人旅、どちらの旅も若かりし頃の懐かしい思い出です。そして若さにものを言わせることができた頃のことです。
冒頭に記しました「おくのほそ道」に大変心を惹かれておりました私は、齢七十歳にしてこの旅の追体験がしてみたくなってしまいました。
現役で仕事をしたり同窓会の役員として活動したりしていましたので、なかなかチャンスを作れずに心ばかり焦っていましたが、古希を迎えるにあたり「ここでやらなくちゃァ一生できない」と腹をくくり冒険の旅に出ました。
実は、同窓会会報の22号（2019 年発行）にも少々書かせていただきましたが。このコーナーにも掲載させていただきます。
　旅のコースは表紙の裏側にある手製地図をご覧ください。「おくのほそ道」の半分ほど、「千住といふ所にて船を上がれば･･･」の墨田川べり「芭蕉翁上陸の地」という記念碑前から、秋田「今象潟に方寸を責む」の象潟まで凡そ1300㎞を50CC のミニバイクで16日間走り続けました。
旅の詳細は拙書にご披露させていただきましたので、今回は思い出に残る写真で綴りたいと思います。
写真も素人ですのでお見苦しいところはご勘弁を。以下、写真とその説明を載せたいと思います。

出発の朝

2017 年 4 月 23 日出発の直前に市川の自宅前で孫が撮ってくれました。

「芭蕉翁上陸の地」（足立区北千住）

千住大橋北詰、国道 4 号脇で当時は護岸工事中でした。

「草加の松原」(旧日光街道埼玉県草加市)

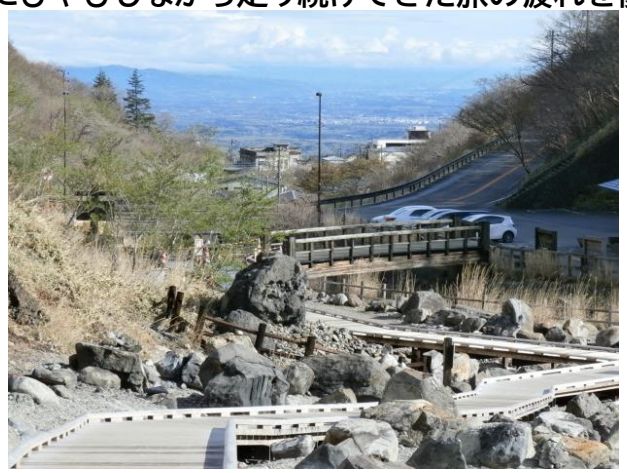
草加市の観光名所として当時をほうふつとさせる橋が作られている。その橋の上より松原を見ました。

日光杉並木寄進碑(日光市・旧今市市)

日光市板橋の日光街道バイパスと例幣使街道の追分、杉並木入口にあります。

「雲巌寺」(栃木県大田原市)

鬱蒼とした森の中に静まりかえった古刹の佇まいは、前日から大雨に祟られ、バイクやナビの不調にひやひしながら走り続けてきた旅の疲れを優しく癒してくれました。



「殺生河原」(栃木県那須町)

さっきまでの大雨が嘘のように晴れ渡りました。殺生河原から那須の町を一望しました。

「遊行柳」（栃木県那須町）

芭蕉翁の憧れの的、西行法師の足跡をたどったそうで「田一枚　植えて立ち去る　柳かな」と詠みました。

「白河の関所跡」（福島県白河市）

関所跡には建物より遺構の「空堀」の壮大さに驚きました。

「可伸（栗斎）庵」（須賀川市中心部）

等窮の家に仮寓していたという可伸＝栗斎の庵跡が小さな公園としてきれいに整備されていました。

「乙字ヶ滝」（須賀川市郊外）

滝の形が「乙」のようになっているという事ですが、どう見てもそのようには見えませんでした。

「会津磐梯山の雄姿」

須賀川から二本松への移動の途中、ふと見ると磐梯山の雄姿が目に入りました。

「高村智恵子の生家」

高村光太郎の「智恵子抄」で有名な智恵子の生家：福島県二本松市（旧安達町）に立ち寄りました。

「松川事件・冤罪との闘いの記念碑」

福島県松川町継立山（旧信夫郡金谷川村）というところにあります。

1949年 8 月 13 日深夜、当時の「国鉄 東北本線」上り線を C51 蒸気機関車牽引の上野行き412列車が、突如脱線転覆し、機関士1名・機関助手2名の計3名が死亡し、後続の貨物車2両・郵便車1両・客車2両も脱線、国鉄労組員など 20 名が逮捕され第一審で5人に死刑を別の5人を無期懲役、他の10人も懲役3年から15年を判決となったものの、全くの謀略で被告たちは冤罪であることが立証され、全員が無罪判決となりました。

この事件は、下山事件（国鉄下山総裁の轢死事件）、三鷹事件（国鉄三鷹電車区から無人の 7 両編成が暴走し脱線転覆し沿線住民など 6 名が即死、20 名が負傷した）とともに戦後三大謀略事件といわれています。

私は数十年前に、山本薩男監督・三國連太郎主演の「にっぽん泥棒物語」を観てこの事件のことを知りましたが、今回の旅の一つの目的は、ここを訪れることだったのです。

２．　福島・宮城・岩手編

私の旅も六日目となりました。
福島市では、文知摺石や鯖湖湯を観ようと思っていました。
鯖湖湯のある飯坂温泉を訪ねた翌日に「熊が出た」というニュースをみてびっくりしました。

「岩屋観音」（福島市内）

岩壁に無数の観音像が彫られています。

「文知摺(もじずり)観音堂」

「文知摺石」（福島市内）

文知摺観音堂の境内に鎮座ましましています。太古の昔、「河原左大臣源融」に恋した娘が融会いたさに、夜も日もこの石に持たれて泣き崩れ、石を布でこすったところ、融の姿が浮かび上がったという謂れです。

「鯖湖湯（さばこゆ）」

（福島市飯坂町）

「飯坂温泉」の中心部にあり、古くから日本最古の木造建築共同浴場として親しまれていたそうです。

「松島」(宮城県)

2011 年 3 月の大震災と大津波の災害を思い出しました。

「北上川河口」(宮城県石巻市)

日和山公園より三陸沖を望みました。東日本大震災の大津波は河口に架かる橋脚の半分以に達したという事です。

北上川上流　「高館義経堂」(たかだちぎけいどう)　北上川下流

とうとうと流れる北上川のほとり(岩手県平泉町)に義経堂があります。
右の写真の河原で「弁慶が敵を前に奮戦、立往生した」といわれています。

「金鶏山」登山口　「義経妻子の墓」　白く可憐な花が

「金鶏山」(約 100m)の登山口に密やかにたたずんでいます。

「出羽街道中山越」

「厳美渓」(岩手県一関市厳美町滝ノ上地区)

上流(上)の荒々しさと下流(下)の穏やかさが対照的です。

「尿前(しとまえ)の関」

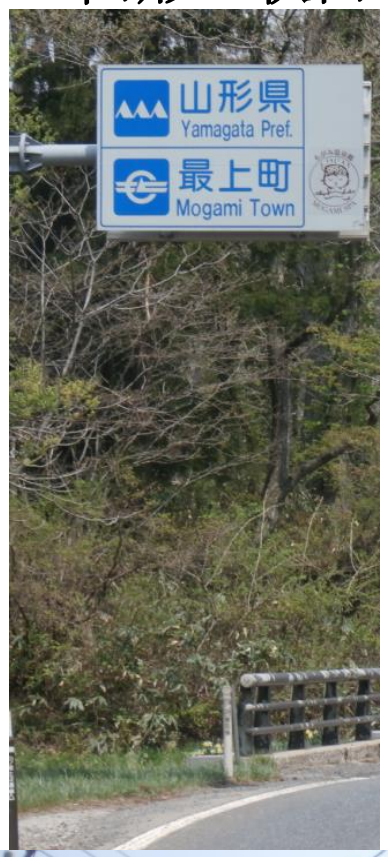
「蚤虱 馬の尿する 枕もと」と芭蕉翁が詠んだところです。

「鳴子峡」(宮城県大崎市)

「大深沢橋」より覗く渓谷

福島を立ち、仙台・利府・多賀城・塩竈・松島・石巻と東日本大震災に見舞われた被災地をめぐり、北上川を遡り登米・一関から平泉まで、そして栗駒山系を走り抜け鳴子へ到着。
この「中山峠」を越すと出羽の国(山形県)に入ります。

３．山形・秋田・苫小牧経由フェリーで帰宅まで



「これより出羽の国」

「封人の家」(ほうじんのいえ)

出羽の国に入り最初に出迎えてくれたのは「封人の家」でした。その昔、中山峠を越えてきた旅人を「誰彼問わず」泊めるなど、困っている人に手を差し伸べる(ご報謝)奇特な村人でした。　とさ。

「山刀(岀)切峠」（なたぎりとうげ：山形県最上町山刀切峠）

5月とはいえ標高約 500m ではまだ残雪があり、峠道は閉鎖されていました。気温は8度ほどです。

「山寺 ： 立石寺りっしゃくじ」（山形市）

石段は全部で1015段、往復には約１時間半とのことです。私は挑戦しませんでした。

「猿羽峠（さばねとうげ）」（最上郡舟方町）

芭蕉一行が実際に歩いた羽州街道。「えっ、こんなところ、ほんとに歩いたのかぁ」とびっくりです。

「最上川舟下り」と「白糸の滝」

あの滝の下の神社への道はありません。どうやってゆくのでしょうか？
渡し舟かな？

「羽黒山」（鐘楼と三山合祭殿）

鐘楼は日本最古で国指定重要指定文化財だそうです。やはり残雪です。（山形県鶴岡市羽黒町手向）
「三山合祭殿」とは「月山」「湯殿山」「羽黒山」のそれぞれの山の神様を一緒に拝むところです。

「羽黒の大鳥居」（羽黒町玉川）

東日本大震災の揺れもあって、2018年に
新しいものに建て替えられました。

日本海に注ぐ「赤川」（酒田市八重浜）

旅に出て 10 日目にして日本海に出会いました。

「鳥海山」（山形県酒田市より）

　三日間雨が続きました。象潟に向かう7号線から久しぶりに山容を見せてくれました。
鳥海山にはいくつもの伝説が伝わっています。この山には「手長足長」という妖怪が山伏の法力で閉じ込められていましたが、鳥海山の大噴火とそれに伴う山体崩壊で、山から逃げ出し旅人に悪さをしたという事です。
　「うやむやの関」という所があります。ここは絶海の難所で旅人を苦しめたそうで、ここを通る旅人は、「手長足長」のいない時を見計らって通行したそうです。この「手長足長」がいるときは「ウヤウヤ」いないときは「ムヤムヤ」と鳴いて知らせてくれたのが「三本足の烏」（羽黒修験者の道案内をした霊鳥）だそうです。
　この時の大噴火で山頂から飛び散った土くれが日本海に飛び「飛島（とびしま）」が生まれたという事です。
　また、これは歴史上の正しい出来事ですが、内海だった「象潟」はこの山体崩壊で流れた大量の土砂と大地震の影響で2～3間も隆起し、陸地になったそうです。

「おくのほそ道句碑」（山形県遊佐町）

「あつみ山や 吹浦かけて 夕すずみ」の句碑が
海を見つめています。

「吹浦海岸」（遊佐町吹浦）

十六羅漢岩近くから遠く象潟方面を望み。
凡そ5Km 程でしょうか素晴らしい砂浜です。

「ヤッホー！　とうとう秋田に来たぞー！

家を出てから14日目、今回の最終目的地「象潟」までもう

「象潟」（秋田県にかほ市）

この土地については「鳥海山」のところで書きましたが、芭蕉翁が訪ねたころは内海でした。ですから、芭蕉は「江の縦横一里ばかり、俤 松島に通よひて、また異なり。松島は笑ふがごとく、象潟は恨むがごとく･･･」と
その印象を詠んでいます。
現在は陸地になり点在する「島」の周りは耕されてすっかり田んぼになっています。

「能因島」

「汐越の橋」

この橋のたもとに「象潟見物の舟寄せ場」と「繋ぎ石」があります。
芭蕉たち一行は、ここから舟を出して九十九島を遊覧したのでしょう。

「埋もれた栗の木」

これはおまけです。「にかほ市博物資料館」の庭先、仮設の屋根の下に鳥海山の山体崩壊で流され埋もれていた栗の木が「東日本海縦貫道路」の建設時に発掘され展示されていました。
お隣の青森県「山内丸山遺跡」で物見やぐらが巨大な栗の木で作られていますが、それに匹敵するものです。

「鼠ヶ関関所跡」

これもおまけです。鶴岡から象潟に行った芭蕉一行は、今度は戻って、越後の国へと旅を続けますが、私の旅は象潟まで、そこからフェリーに乗る予定ですので、鶴岡にいる間に出羽の国は見ておこうと、あつみ温泉まで行き、その先の「鼠ヶ関」まで行きました。

「あつみ温泉駅」

ここには、こんな看板が立っていました。「また来るけの～」「達者でいろや～」との思いであります。

秋田市で一泊し秋田港からフェリーで苫小牧へ、そこでもう一泊しサンフラワーフェリーに乗換えて茨城県大洗港へ到着。一路市川へ、16 日間の旅を終えました。